

西南戦争と大阪陸軍臨時病院

鈴木 紀子

東京女子医科大学病院／国士舘大学人文科学系博士課程

1877(明治10)年2月に勃発した西南戦争による戦死者は、政府軍は6,843名(参謀本部編纂課編『従西戦記稿』陸軍文庫, 1887年)、薩摩軍は6,785名(「西南戦争薩摩戦没者全名簿」とされており、多くの負傷者に対して両軍はともに病院を設け、医師や看護人を派遣して治療と看護にあたった。

薩軍は本営を熊本に置くと、病院本部を川尻の延寿寺に置き、熊本城下各地に出張病院を置いた。そこで行われた看護活動に関しては、「西南戦争と薩軍の看護活動」(宮下満朗「敬天愛人第十六号」西郷南洲顕彰会, 1998年)で、各地方の婦女を雇っていたことが確認されている。

『大阪病院報告』1873(明治6)年に国民皆兵の徴兵制を導入し、西南戦争における政軍の勝利により、徴兵制度は確立したが、兵士不足と共に、戦時に必要となる看護人の確保をどうするかは、政府が取り組まなければならない一つの課題となった。西南戦争の研究では、戦いやその後の政治に及ぼした影響などが論じられてきたが、兵力に直接影響した傷病兵に対する医療活動を知ることは、その後の医療の進歩にいかなる影響を与えたかを考察するうえで意義がある。本研究では、実際に大阪陸軍臨時病院で、どのような治療と看護が行われたかを『大阪陸軍臨時病院報告摘要報告第一号』(陸軍文庫, 明治11年6月)(以下『大阪病院報告』とする)から明らかにすることであり、特に看護活動がどのように行われたかを明らかにし、陸軍の看護制度改革に及ぼした影響を考察する。

戦場で負傷兵が日々増加するに至り、戦場近くに支病院を各地に置くことは、医官の負担が大きくなるなどの問題が起こっていた。すでに米国内南北戦争の時に、最初は傷病者を煉瓦剛石の病室で治療したが、負傷兵の増加に応じて巨大な木造の仮病院を建設し、そこに負傷兵を収容して治療を施したところ、著しく速やかに治療が進んだとの検証があったことを参考に、巨大病院を作ることが大益があるとの判断から、建設地が検討された。その結果、負傷者の治療に際して、需要の品物の補充などに利便性のある大阪が選ばれた。すでに1870(明治3)年2月19日に軍事病院が大阪病院に置かれ、オランダ陸軍軍医ボードインが中心となって西洋医学による治療が行われていた。

西南戦争で大阪陸軍臨時病院に搬送されて治療を受けた者の総数は8,569名、そのうち退院したものは4,855名、死亡は495名であり、3月から7月までの5ヶ月間入院した者は4,168名であった。看護にあたった看病人は、一等看病人2名、二等看病人10名、三等看病人39名、その他に「患者取締曹長」が14名いたことが記録されている。

西南戦争における負傷兵の多さに対して、『大阪病院報告』に記録されている看病人だけでは到底看護は行えず、実際には「看病夫」を日給で雇っていた。「看病夫」の雇い方法は、新聞と門外への提示で志願者を募り、体格などを検査後、合格した者を日給金25銭から18銭で雇い、その総数は合計1,576名であった。さらに、雇い入れた「看病夫」の中から看護方法を熟達した者に対しては、大阪陸軍臨時病院の名で、「証書」を与え、熟達したものを速やかに集める方法をとった。

大阪陸軍臨時病院が、西南戦争中に独自に証書を与えた「看病夫」の数は合計255名に及んだ。西南戦争は、戦時における看護の方法を修得した兵士の必要性和、早急な人員確保対策の必要性を、政府が認識するきっかけとなった。